

二〇一六年四月六日

発行責任者

社民党がんばれOB・G福島の会

eメール huruya.michitatsu@orange.plala.or.jp

いい湯だな

みんなそれぞれ

薬出す

(シルバー川柳より)

やりたい放題の安倍政権・

究極の同日選挙戦術!!

「安倍晋三首相は、参院選と同時に衆院選を行う衆・参同日選も選択肢に今後の政権運営に臨んでいる。高い支持率を維持できている今、同日選で投票率を上げ将来の憲法改正をにらんでの議席獲得である。加えて自民党内においても同日選を見据えた発言が出始めている。

さて、この同日選挙だがにわかに浮かび上がったことなのだろうか。もちろん内閣支持率と公明党、加えて「おおさか維新」との連携強化は「改憲勢力」の多数派を意味する。また、党内の抵抗分子を抑え込むためにも「公認権」を握る総裁でもある首相が、ほのめかす「解散発言」は有効である。

しかし、その根っこには、昨年の安保関連法に示した抗議行動は60年安保闘争を想起させる国民的な立ち上がりであり、祖父「岸信介元首相」の退陣が脳裏を横切ったであろうことは間違いない。そうであればこの大衆のエネルギ―をそり落とさなければならぬ。そのために夏の選挙で圧勝し、政権浮揚を事実化し、その動きを抑えるという筋道を立てても不思議ではない。そして選挙の結果をもって安倍首相

は記者会見の臨み、次のように強弁するだろう。「これだけの支持がある。その支持を尊重する事こそ政治の常道である。私は支持された」と。

今一度・地方議員選挙に取り組もう

そこで記憶を戻してみる。昨年の衆議院予算委員会における集団的自衛権行使の閣議決定の是非をめぐる論議での安倍首相の発言がある。「最高責任者は私だ。政府答弁に私が責任をもって答える。その上で、選挙での審判を受ける。審判を受けるのは私だ」と。残念だが、その姿勢は「安倍政権」には有効かつ強力な武器となった。そして、それをさらに確実なものにするため「国会解散。総選挙」に掛けると考えられないか。そして安倍側近の決断も、その時に決まっていたと考えても不思議ではない。

さらに「無いとは思うが、いやあるかもしれない安倍流の『究極の戦術』である、消費税8%据え置き」である。それが「ノーベル賞経済学者の招聘と権威づけ」と見るがどうだろう。

三月十二日に開催された自民党大会での「民・共」と「自・公」との対決宣言の発言がある。この言葉に共産党志位委員長は笑んでいるだろう。かつての「反共」宣伝は通用しない。

むしろ自民党総理・総裁が追い風を送ってくれたからである。その裏で、少数政党にとつては極めて厳しい戦いになることは必定である。「蚊帳の外」に放り出されかねない。

改めて提起をしたい。多くの得票を望む必要はない。次の文章は埼玉熊谷総支部の討議資料によるものである。「社会新報の新聞折込、地域無差別配布などで浮動票を取れる時代はない。とりわけ社民党にはその条件が無いと言ふ事です。市議会議員選挙並みの行動が必要」だ。その通りだと考える。「今一度、地方選挙」を取り組めないか。候補者記名で獲得した票を「社民党」と書き換えることを求める運動である。その運動は、支持をしてくれた皆さんへの感謝の訪問にもなるだろうし、次の支持を確実なものにすることに結び付くだろう。

問題は、「比例区は社民党」の訴えをどれだけ具体的に述べ広めるかである。社民党県連合は県内比例票3万6000を目標に掲げている。その票を確実にし、少しでも上乗せするために「私の町でどれだけ社民党票を集めるか」を逆算してみよう。大きな数字だろうか。むしろ「見える数字」と思うがどうだろう。

「保育所落ちた、日本死ぬ！」のブログが政治を動かした。では「特老施設に入れない、日本死ぬ!!」と叫んでも不思議ではない高齢者の実態がそこにある。若いママたちが政治を動かした。そうだとするならば3割を超えるシルバー有権者の力を示す時が「今」だと提起したい。

社民党がんばれOB・G福島の会

再建に向けて一歩前に

全国協・宇津木事務局長を迎えて

地役担当者会議開催する・3月26日

冬眠中のクマは、冬眠前に食べた餌を、腸内にためたままにしている。そのため腸内の異常醗酵が血液は汚し、毒素を体中にためる。そこで冬ごもりから出てきたクマは、最初に雪の下に残ったクマ笹を食べる。クマ笹が腸の異常な醗酵を防ぎ、血液浄化作用や解毒作用がある事を本能的に知っているからである。

前福島市議・杉原二雄さんを会長に！

今般「OB・G福島の会」も「長い休眠」から抜け出すことができた。どうしてと思われるかも知れない。実は会長をはじめとする「運営委員会」が成立していなかったのである。つまり「高齢化の中で失った役員の補充ができなかった」というのがその理由である。

しかし、幸いにして存在していたのが「OB・Gニュース」の発行であった。そのニュースを読者の皆さんに配布を続けてきた地域の担当者の努力がそこにあった。

休眠から目覚めた「社民党がんばれOB・G福島の会」は、再起した運営委員会を軸にその名のごとく「年金生活者」の組織として、自らの『老い』の保証を政治を通して実現させるため、社民党拡大の実現に向けて応援を続ける決意をあらたにしたのが、今般開催された「再建

会議」である。

具体的には次のことが確認された。

ニュースの発行

配布体制の継続について

◆ 社民党の地域組織に「ニュース配布地域局」をつくる。その配布責任者を局長とする。なお、地域局に分局を置き複数による無理のない配布体制を検討する。

◆ ニュースは、局長が指定する住所に郵送をする。なお分局ができた場合も同様とする。

◆ 当面、ニュースは郵送とするが、早い時期に現地の地域局で印刷（自費印刷）が可能かの検討を求める。

※若松・石川は現地で印刷を行っている。

◆ 年一回の局長会議を開催する。

◆ ニュースの県内配布部数は4月1日現在650である。今後1000部の発行を目標とする。よって各地域局3割の拡大に向け努力をする。

地区の会の設立について

OB・G福島の会（後日Gを加える）の設立時は、いわき・伊達・白河・郡山の四地区に「地区の会」が設立されたが現在は白河・郡山にとどまっている。地域局の強化の具現化のためにも「地区の会」の設立は必要である。すでに、社民党を支持する高齢者組織が存在をしている地域もあり画一的には進められないが「個人加盟・社

民党応援高齢者組織」の確立を課題とする。
総会、及び研修会の実施について

総会の開催については、年一回の定期招集とする。今年度総会は参議院選挙を意識し6月上旬に開催をする。運営委員の選出は総会によるが、今般の再建会議をもって確認した杉原会長の名において総会を招集し運営委員の正式承認とする。

総会には地域局から代表と当該党総支部から一名のオブ参加を要請する。

年一回の研修会（講演会）を開催する。

運営委員会体制について

会長	杉原二雄（福島）
副会長	河辺信雄（三春）
事務局長	佐藤幸夫（郡山）
委員	降矢通敦（郡山）
	渡辺敏雄（会津若松）
	渡辺二公（猪苗代）
	西尾紀平（いわき）
	熊木武行（白河）
	吉田賢一（伊達）

※ 事務局次長は福島在住の方の選任を今後の課題とする。

※ 運営委員会は総会、研修会、その都度の課題の協議のために開催をする。年二回を目標にする。



【寄稿】

「いんぎょ」から「ぼやき」への旅

『これはどうしたものだろうか』と思う。テレビをつければ、待機児童問題で子どもを保育所に入れることができないと、若いお母さんたちの叫びが画面からあふれていた。次の報道では、軽度の認知症の人が認知症の家族を介護する認知介護の問題が取り上げられていた。『これもどうしたものだろうか』

両親が元気でいるからこそ、私も今の生活が成り立っているが、介護が必要となったらどうなるのだろうか。そして自分たちの老後にも不安は尽きない。主婦向の雑誌などには、子どもたちの学費が掛からなくなった時期が、老後資金の貯め時との特集などもあるが、まさに今と比べてはみても、家計簿とのにらめっこの日々は続く。この地で自分の家族を築こうと思っっている息子も、きつと保育所の問題に悩むこともあるだろう。あまり明るい未来も見えてこない気分である。ふうくとため息が出てしまう。そんな時に思い出したことがあった。もう十五年以上も前のことだ。職場の愚痴がこぼれた私に、わりと穏やかだと思っていた小学生の息子が『悔しかったら、社長になるしかない。自分が一番偉くなるしかないよ』と言った言葉に、確かに納得したことがあった。さて、じゃあ今の世の中で、一番偉いのは誰かと思ってみる。総理大臣、陰の立役者、いやいやそれも違う気

がする。『国民主権』教科書にあったその言葉をつぶやいてみた。『悔しかったら、自分からその主権を引き寄せなければいけない。国民が一番偉くなるしかない』あの日の幼い息子が言ったように。

大切と思うことを、『事なかれ』主義的に流されてしまうことに、怒りを感じるのであれば、『事なかれ』な自分から、まずは小さな一歩を踏み出さねばと思う。いろいろな話に耳を傾けてみるとか、自分の思いを口に出してみるとか、もちろん選挙に足を運ぶとか。

少し前の学習塾のCMではないが、やる気スイツチ押さない。いつ押すの？今でしょ！

【郡山市在住 50代主婦】



ニュースを読んで

ニュース3月号ありがとうございます。5年もたつというのに中間貯蔵や汚染水の凍土壁のことなど本当に腹が立つことばかりです。社民党議員と党と平和運動センターの関係は、津久見市では少なくとも「三者合同会議」というそれぞれの代表者の会議をもって、市議会の質疑に関する「問答集」などの討論をしていま

す。また、県下の54名が居る社民党系の県議団・市議団は議会開催を前にして合同会議をひらき、質問の内容についてもお互い学習会を開いて意思統一をしています。追及が足りないならば、その会議で指摘することができるようになっています。

地震、津波、原発災害の複合災害から間もなく5年を迎えます。なのに、復興は遅々として進まず原発再稼働だけが異常な速さで進んでいます。とりわけ、九州の川内原発に続き、この夏にも大分から45キロの伊方原発が再稼働されようとしています。東北のみなさんに申し訳ない思いでいっぱいです。「フクシマ」を忘れないという立場で、大分でも反原発の戦いを粘り強くつづけてゆくことが大切だとおもいます。13日の日曜日は、大分駅前でのその集會が開かれますので参加してきます。

中間貯蔵施設予定地に5〜6段に積み上げられた黒い袋は、原発災害の恐ろしさと、これからの復興作業の困難さを語っているようです。大変貴重な写真と報告をありがとうございます。「復興集中期間」から「復興創生期間」と今後の5年間を位置づけ、2020年東京五輪を「復興五輪」としたい政府の思惑通りに、事が運ぶとは思えません。今日の新聞を見ますと「衆・参同日選、消費増税先送り」選挙が現実味を帯びてきました。憲法改正の前にはなんでもやるという安倍流はしたたかです。

【がんばれ社民党大分事務局長・池見耕司さん】

Aさん宅を訪問して 85歳と80歳の会話

Aさん、過日は久しぶりにお邪魔をいたしました。奥様のご逝去に際しましてはお手紙にて失礼をいたしました。その後どうなされているかと気にはなっていました。この度血色の良いお顔を拝見し嬉しく思いました。

奥様はとても明るいお方でした。ご主人の仲間の奥様同士での温泉通いなどのお話を受けたまったら時は、つい時間の経つのを忘れたことを懐かしく思い出しました。

さて、Aさんは開口一番「いいところに来てくれた。聞いてもらいたいことがある」と言われました。それは今後の身の振り方でした。そして取り出してきた封筒の中身は「介護付き高齢者賃貸住宅」のパンフでした。お一人の息子さんが住んでおられる町の施設です。息子さんにとっては、離れて暮らす独居の父親は心配でしょう。だからと言って戻るわけにはいかないし、同居を決断もままならないと思います。Aさんもそのことを望まないと述べておられます。そこでの提案だと私は受け止めました。

Aさんの介護認定は「要支援2」、週2回のリハビリサービスに通っておられるとのこと。お元気なほうだとは思いますが。

毎日の食材を始めとしての買い物に200m程先のスーパーは助かると思います。どうぞ段差と車には注意をしてください。しかし、清潔な居室も肝要と思います。家事援助の訪問介護を

求めることをお勧めいたします。そのことはヘルパーさんとの会話もできます。またその訪問を意識して身だしなみを整えることも大事なことだと思えます。私は訪問先でのお茶、コーヒーの勧めは遠慮をしないで頂くことにしています。それは来客のためにお茶を用意するという所作と後片付けをするということは、本人にとっても良いことだと思っているからです。

さて、息子さんからの提案である施設への入所です。迷っているようですが、私はお勧めいたしません。家があり、住み慣れたところから離れることへの拒絶反応はあると思います。しかし、いずれは決断をしなければならぬ時が来ます。その判断と決断を自分ができる時が今だと思えます。年金も含めて、経済的には受け入れる条件はあるのですから。預貯金などを子どもさんに残す必要はありません。しっかりと自分のために使うべきです。あちらには銀行も無ければ、不動産家もいません。亡き奥様もそのことを望んでおられると思います。

私たちは「マイホームの時代」に所帯を持ちました。年々の賃上げもありました。共働きも珍しくありませんでした。マイカーは無く、電化もテレビ・冷蔵庫・炊飯器、そして洗濯機の類でした。とりわけ洗濯機は女性の家事労働を助けました。預金が10年間で倍に、融資も借り手有利の条件にありました。よって私どもは自家をもつことができました。それが、今ある意味では重荷になっています。しかし、割り切る

知恵を持ちたいと思えます。所帯を持ち、子どもを育て、そして今があるこの期間で、十分に「減価償却」はできたのではないのでしょうか。現在、空き家が目立ちます。その多くがマイホームの夢を実現した結果です。

幸いにして息子さんは、将来故郷に帰ってきたいと述べていると聞きました。自分が生まれ育った家に戻りたいということはありがたいことです。そうであれば「家の保存管理」を頼むことも選択の一つと思えます。例えば市のシルバー人材センターに「留守宅管理」を依頼することも可能です。時には、息子さんの車で一時帰宅も良いのではないのでしょうか。

長話をしましたが玄関まで見送りに出られたお顔に「安堵」の表情があったこと嬉しく思いました。80歳と85歳があれこれと語り合ったひと時でした。しかも、その年齢であるからその遠慮のない会話もできました。このような人間関係が「高齢者同士の場」なのだと感じました。OB・Gの会も、そのような関係づくりになればと思います。

運営委員によるニュースの手配りもそのよきな意味が持てればと考えています。先輩ありがとうございます。先輩ありがとうございました。(文責・降矢)

